

ワタルと姉の「理由」をめぐる夏休み

第一話

「ワタル、ここなんだけどさ」

だまって原稿用紙げんこうようしに見入っていた姉ちゃんが、ふいに目だけをおれの方に向けてそうやってきた。ぜったいにケチをつける気だ。だから姉ちゃんなんかに見せるのはいやだったんだ。

「ああ？ なんだよ？」

不快な気持ちをおろそかにせず、まゆをひそめて姉ちゃんのをにらみ返した。でも、姉ちゃんは平然とつづける。

「ここ、四行目。あんた、この文を『なぜなら』で書き出しているけど、その後がぜんぜん理由になってないよ。」

リユウになってない……？おれは姉ちゃんの言っていることの意味がわからなくて、またさらにまゆをひそめないといけなくなった。

どうやらそんなおれを一目見て、この出来の悪い弟は全く事態を飲みこめていないんだってみやぶったらしい。姉ちゃんは原稿用紙をテーブルの上に置いた。おしつけるでもなく、放り投げるでもない、やけにやさしいんだけど、有無を言わせないような手つきで。そうしようとしたわけでもなさそうなのに、テーブルのふちのラインと原稿用紙の手前側の辺がきっちり平行線をつくっている。それで、おれはなぜだか「どうやらこれはにげられないな」って思ったんだ。

「ほら、その手前から読んでみて。いくよ」

この本はとてもおもしろかったです。なぜなら、ヘンリーがチョコレートを生み出すまほうを知ったのに、とめるまほうを知らなかったから、町がチョコレートのだいごうずいになってしまったところが楽しかったからです。

「これじゃ、あきらかにへんでしょ」

姉ちゃんの声は少し低い。落ち着いた声で大人っぽいつてよく言われてる。そんな声で作文を読み上げられると、それを書いた本人としてはめちゃくちゃはずかしい気分になる。

「いや、これのどこがいけないんだよ？」

「まず、ひらがなが多すぎるし、この『なぜなら』で始まる文が長すぎるっていうのもあるけど、まあそういうのは目をつぶろう。それよりも大きな問題はね、さっきも言ったように、あんたの書いていることは全く理由になってないの」

「だから、それがわけわかんないんだよ。『なぜなら』って書いてんだから理由じゃんか。しかも最後にちゃんと『から』ってつけてるし」

あ、早くも出た、姉ちゃんのため息。「あんたもう勝ち目ないわよ」と言わんばかりだ。姉ちゃんはいつもこういうため息でおれをおいやつていく。

「いい？ 『なぜなら』にできることは、せいぜいそのあとにつづく内容が理由であることをはっきりさせることだけ。この言葉があとの内容を理由に変えてくれるわけじゃないの。だから、理由になっていないものが

つづくのなら、『なぜなら』を書く意味がぜんぜん無いのよ」

「でもさ、理由になってないって言ったって、どうしてそれが姉ちゃんにわかるんだよ？ 姉ちゃんがおれの頭の中を見れるわけじゃないだろ？ おれの考えの中ではまちがいがなく理由なの。それに文句つけられる筋合いはないよ」

「どうだ、われながらカンペキなハンロンではないか…と思った矢先、また出たんだ。姉ちゃんのため息。しかも今度は口じゃなくて鼻で息をはきだすパターンで。」

「この文、あれこれつめこまれているからちょっと分かりにくいかもしれないけど、『なぜなら』が直接かかるのは、結局『くからです』という表現になっている文節なの。ようするに、あんたの文の中では、『なぜなら』と直接つながるのは『たのしかったからです』だというわけ。だから、その間にあるいろいろな言葉は省略して『○○』というところが』という形にかえましょう。それで文全体を書き直してみればこうなる」

なぜなら、○○というところがたのしかったからです。

姉ちゃんが原稿用紙のわくの外にそう書きこんだ。おいおい、ボールペンで書いてるじゃないか。これじゃあ先生に出せないよ。いや、むしろこれは「ぜったいに書き直せよ」という姉ちゃんの無言の圧力なのか。「わかったでしょ？ その前の文もつなげれば、

この本はともおもしろかったです。なぜなら、〇〇というところがたのしかったからです。

になるの。本がおもしろかった理由が、『その本のある部分がたのしかったから』になっちゃうわけ。これで理由として成り立ってるって言い張れる？」

こりゃあ変だとおれも思ったね。どうして本の中の一部分がたのしかったからって、その本全体がおもしろいことになるんだ。さっき「おれの中ではまちがいを理由だ」なんてハツタリをかましたのがはずかしくなってきた。

とはいえ、なんだか頭の中がモヤモヤしてきた。へ理由として成り立つって、そもそもどういうことを言うんだろ？

「あんた、『へ理由として成り立つって、そもそもどういふことを言うんだろ？』って顔してるわね？」

心の中をあつさり見ぬかれてドキッとしたけれど、それよりも、そのあと窓の外に目をうつして遠くを見つめる姉ちゃんの雰囲気ふんいきに、もっとドキッとした。

「正直、それは私にも答えられない難しい問題ね。見方を変えれば、へ理由とは何か？という問いだと言ってもいい。これはとてもとても深く切実な問いだわ。その答えが簡単に出せるなら、わたしたちはどんなに楽になれるだろう」

姉ちゃんはよくこんなふうに自分の考えの中にしずみこむ感じになる。くやしいけど、こうなるとき姉ちゃんはちょっとカッコイイ。ケンジャとかテツガクシャってこういうのをいうのだろうか。

「ただ、一つたしかに言えることは、この世界のあらゆることに理由をつけられるわけではないということ。なんでもかんでも理由がつけられるわけじゃないの。どうしても理由をつけるのが難しいことが、この世には存在する」

そうしずかに言うと、姉ちゃんはおれの方に視線をもどした。家のすぐそばでツクツクボウシが鳴き始めるのが聞こえた。

「あんたがこの本を読んでおもしろいと思ったことも、それにあてはまるかもしれない」

「えっ」

おれの心臓が高鳴る。姉ちゃんの言っていることが分からないのではない。むしろ、次に言われるであろうことが手に取るようにわかってしまった。

「そう。つまり、あんたの抱いた^{いだ}『おもしろかった』という感想。これって本当に理由をつけられることなのかしら。ここで理由を書く意味、本当にあるの？」

理由を書く意味。この言葉がおれの頭の中でカランと音を立てた。その音の波がどんどん反響^{はんきょう}して大きくなうずができあがるうとしているのを、おれはたしかに感じていた。

(つづく)